

隆慶一郎

一夢庵風流記

新潮文庫



いち む あん ふう りゅう き
一 夢 庵 風 流 記

新潮文庫

り - 2 - 4



平成三年九月二十五日 発行
平成八年十月二十五日 二十刷

著 者 隆 慶 一 郎

発行者 佐藤 隆 信

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

編集部(〇三)三二六六―五四四〇
電話 読者係(〇三)三二六六―五一一一

振替 〇〇一四〇―五一八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

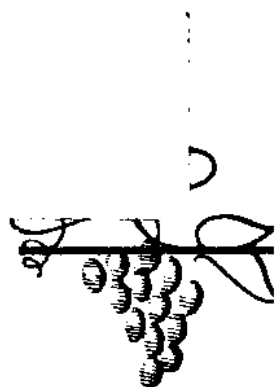
© Jun Ikeda 1989 Printed in Japan

ISBN4-10-117414-8 C0193

新 潮 文 庫

一 夢 庵 風 流 記

隆 慶 一 郎 著



目 次

かぶき者	九
無念の人	二三
松風	一九
馳走	三九
敦賀城	四九
七里半越え	五九
聚楽第	七〇
決闘ばやり	一〇〇
男惚れ	一二九
骨	一四五

女	体	一五九
死	地	一八〇
佐渡	攻め	二〇〇
傀儡子	舞い	二二二
子供	狩り	二五二
治	部	二六二
唐	入り	三〇二
伽倻	琴	三三二
伽倻	姫	三四二
漢	陽	三八〇

帰	還	四一四
唐入り御陣	四四三	
難波の夢	四六三	
天下取り	四八四	
会津陣	四九三	
最上の戦い	五二二	
講和	五三〇	
風流	五四三	
後書	五五四	

一夢庵風流記

二
郎
に

かぶき者

『かぶき者』はまた『傾き者』、『傾奇者』とも書く。最後の書き方が最も端的に言葉の内容を示しているように思われる。ほかに『傾く』という動詞や、『傾いた』という形容詞もある。

つまりは異風の姿形すがたかたちを好み、異様な振舞いで人を驚かすのを愛することを『傾く』と云ったのである。

久しい以前から、この言葉が、私の胸の中で格別に大きな位置を占めるようになって来ていた。

もともとは野暮の骨頂こつちようで、服装などには全く無関心な男だった。四十代の半ば頃ころだったろうか。仕事の関係で関西のテレビ局のディレクターとつきあうことになった。若いくせに羅漢かんさんのようなつるつ禿ぼけで、かわりに長い顎鬚あごひげをのばしていた。それがまん丸い童顔によく似合った。いつもにこにこしている機嫌きげんのいい小男で、仕事の時の服装は常にデニムのジーンズの上下である。時につなぎのこともあった。その職工に似た身なりが、ディレクターという商売にぴったりだった。腕もいいし、人柄ひとがらもよさそうなのに、妙にしっくりいかないと

ころがあつた。何か小骨のようにこつこつと当るのである。言葉のはしばしや、なにげない態度にそれが出る。正直いって気に入らなかつた。

私は人間関係が巧くゆかないと仕事を続けられない我儘な気質だつた。なんとかしなくちやいけないなと思い、或る日、全く個人的なデイトを申し込んだ。ホテルのラウンジで待合せすることになった。先に行つて入口の見える席に坐り、待つた。こういう場所に入つて来る様子で、男の人となりが或る程度判るからだ。

やがて彼は現れた。

私は肝をつぶしたと云つていい。

ホテルのドアを通り、ロビーに入つて一瞬足をとめた彼の姿は、それほどきらびやかなものだったのである。

今、この文章を書きながらも、二十年近い昔の彼の姿が、まざまざと眼前に浮ぶ思いがする。それほど衝撃だつた。

彼は鮮やかなワイン・レッドの天鵝絨の三ツ揃いに身を包んでいた。ビロードという感じではなかつた。どうしても天鵝絨である。Yシャツは薄色のグレイ。細い革の、同色のネクタイをしめている。小柄な彼の背がかなり伸びたように見えた。恐ろしく高いハイヒールのブーツをはいていた。その色もワイン・レッドだつた。

私の文章では、その時の彼の感じを正確に描くことが出来ないようだ。読者はひどくきざな、或はチンドン屋のようにければいい服装を想像されるかもしれない。だが違ふのであ

る。そのワイン・レッドの服の上に乗っているのが、頭髮が一本もなく、顎鬚ばかり長い達磨だるまのような童顔だと、けばけばしい感じが全く消え、異風だがすっきりとしたものに変つてしまうのである。その姿は確実に美しかった。そして明らかに『傾かぶい』ていた。私は一瞬にこの男を理解したように思う。そして、なんと、羨うらやましさに身の慄ふるえる思いがした。

「素晴らしいね」

私は心底からそう云い、彼はにっこり笑った。

意外に思われるかもしれないが、ディレクターとしての彼がつくり出す画面は決してきらびやかではなく、寧ろ地味に抑えすぎ、時に暗くさえあつた。だがその暗い画面の底に一種異様な艶つやがあつた。それが『傾奇者』の窮極の美意識であることを、今の私は理解している。だがこの気難しい美意識は他人に理解されることが少く、彼を焦こらだたせていたのではない。それが対人関係では、私を戸まどわせた反骨の小骨となつて現れ、時にワイン・レッドの天鵲絨の三ツ揃いとなつて爆発したのであろう。このディレクターはその笑顔とは裏腹に、決して倅しあわせな男ではなかつたと思う。

『傾奇者』はいつの世にもいる。

室町時代『ばさら』と呼ばれた佐々木道誉どうよ、戦国期の織田信長おだのぶなが、慶長の大鳥逸兵衛、明暦めいれきの水野十郎左衛門じゅうろうざえもん。数えあげればきりが無い。

彼らは一様にきらびやかに生き、一抹いちまつの悲しさと涼やかさを残して、速やかに死んでいっ

た。ほとんどの男が終りを全うしていない。

『傾奇者』にとつては、その悲惨さが栄光のあかしだったのではあるまいか。

彼らはまた一様に、高度の文化的素養の持主だった。時に野蛮とも思われる乱暴狼藉の蔭に隠れてはいるが、大方が時代の文化の先端をゆく男たちなのである。田夫野人とは程遠い生きものであり、秘かに繊細な美意識を育てていたように見える。それがまた一様に『滅びの美学』だったのではあるまいか。

そして最後に、彼等は一様に世人から不当な評価を受けているように思われる。或は我から望んでそうした評価を受けようとした節さえ見られる。なんとも奇妙な心情であるが、彼等はそこに世の常とは違つて、一種の栄光を見ていたような気がする。これこそ滅びの美意識の最たるものではないか。私は彼等の中に正しく『日本書紀』に書かれた素戔鳴尊の後裔を見る。

『故れ天上に住む可からず。亦葦原中国に居る可からず。宜しく急に底根国に適ねといひて、乃ち共に逐降去りき』

これが神々の素戔鳴尊に下した宣告である。

『時に霖ふる。素戔鳴尊青草を結び束ねて、簀笠と為し、宿を衆神に乞ふ。衆神曰さく。汝は此れ躬の行濁悪しくして逐謫めらるる者なり。如何にぞ宿を我に乞ふぞといひて、遂に同

に距ぐ。是を以て風雨甚しと雖も、留り休むことを得ず、辛苦みつつ降りき』

私はこの『辛苦みつつ降りき』という言葉が好きだ。学者はここに人間のために苦悩する神、堕ちた神の姿を見るが、私は単に一箇の真の男の姿を見る。それで満足である。『辛苦みつつ降りき』ることも出来ない奴が、何が男かと思う。そして数多くの『傾奇者』たちは、素戔鳴尊を知ると知らざるとに拘らず、揃って一言半句の苦情も云うことなく、霖の中を『辛苦みつつ降りき』っていった男たちだったように思う。

無念の人

前田慶次郎利益（利太とも書く）は滝川左近将監一益の従兄弟（甥とも云う）滝川儀太夫益氏の子である。永禄十二年（一五六九）、尾張の荒子城主前田利久の養子になり、当然その名跡を継ぐ筈だったが、織田信長の命令によつて、荒子城は利久の弟前田利家に与えられ、ることになった。利家は利久の父前田縫殿助利昌の四男だったのだから、これは全く異例の処置だったといえる。その上、利久は城を追われた。

お蔭で慶次郎は養父利久一家を若年の身で双肩に担い、天下流浪の身となった。本来なら利家の食客となることも出来たのだろうが、利久は意地でも利家の世話にはなりたくなかつ

たのであろう。その上、利久の妻が利家に非常な怨みを抱き、巫女を招いて利家を呪咀させたので、益々荒子にすることが出来なくなったようである。

慶次郎は人生の出発点でまず蹴つまずいたことになる。それが彼を『無念の人』とし、後の人格形成に大きな影響を及ぼしたのであろうことは、想像に難くない。

慶次郎は後に竜碎軒不便斎、或は穀蔵院ひよつとこ斎を名乗り、一夢庵主と号した。この『一夢』を一国一城の主になる夢だと解釈する史家もあるが、果してそうだろうか。私にはそう単純なものではなかったように思われる。

滝川一益は信長の寵臣である。とにかくこの甲賀生れの男は、戦争をするために生れて来たような人物だった。当時、まだ珍しかった鉄砲の名手であり、鉄砲隊の使い方が巧みだった。信長も史上初の鉄砲隊の使い上手と云われるが、その名声の幾分かはこの一益のお蔭だった。そしてその点を信長に買われ、新しい合戦が起ると、ほとんど常に一益が先鋒にされた。いってみれば今日の極道の『鉄砲玉』のようなものだ。そして一益は大方の合戦に勝利を収めた。

滝川儀太夫益氏は、その一益の部隊の中で更に先鋒を勤めるのが例だった。それだけ一益に信頼されていたわけで、勿論勇猛無比の『いくさ人』だった。だからその子である慶次郎が、滝川一族に属していたために信長に忌避されたわけがない。慶次郎が荒子城を継げなかったのは、養父利久のためである。

前田利久は武の人ではなかった。どちらかといえば治の人である。荒子城といっても、當時陣屋に毛の生えたようなものであり、利久も土豪というよりは名主に近い人物だった。

武にうとい利久は、誰か強力な武人の庇護を受けなくてはやってゆけない。利久は永禄三年（一五六〇）の父利昌の死によって荒子城主を継ぐや否や、那古屋城の林佐渡守秀貞にしみを通じることになった。つまり荒子地方は、林佐渡守の勢力範囲に組み込まれたのである。

林佐渡守は信長の腹心である。だから何の問題もない筈だったのだが、三年前の弘治三年（二五五七）、その佐渡守の弟林美作守通勝が、末森城にいた信長の次弟織田勘十郎信行と手を結んで、叛乱を起し、信長自身の槍で突き殺されるという事件があった。尾張稻生の合戦である。後に勘十郎信行も家老柴田権六勝家の裏切りによって殺され、一件は落着いたように見えたが、弟を殺されて平気な男がいるわけがない。信長は林佐渡守にひそかな警戒を払い続けて来た。

そこへこの荒子の家督相続問題が起きた。

養子縁組は主君の承認を受けなくてはならないきまりである。だから利久が信長に申請したのは当然の処置である。信長はこの機会を素早く捕えた。荒子地方を林佐渡守の勢力範囲から奪還しなければならぬ。それには自分の腹心とも云うべき、四男又十郎利家を荒子に配するのが一番だった。

これが前田慶次郎を、『無念の人』に仕立てた極めて現実的な理由だった。慶次郎は己れ